第４講　倫理総まくり①

入試にはこう出る！　青年期・源流思想・日本思想

1　マーガレット＝ミード（米）は，サモア島などでの調査から，歴史的・地域的な状況が個性の形成に大きく影響すると考えた。

2　乳児から高齢者に至る発達過程を理論化したエリクソンは，成熟した人格の確立には，他者からの視点を意識しつつ，物事を客観的にとらえる脱中心化が不可欠であると考えた。

3　自我同一性の拡散を表す用語として，通過儀礼〔イニシエーション〕，モラトリアム人間，自意識過剰などがあげられる。

4　マズローは，自己実現に至る欲求の５つの階層のなかで，身体の安全を求める欲求より上位に，他者に認められたい欲求を置いた。

5　若者たちのアイデンティティの形成には，アニメやロックミュージックなどのようなサブカルチャーが影響を与えてきた。

6　ギリシャ自然哲学の考えでは，事物は多様な仕方で生成するが，その根源には「空気」「水」「火」といった構成元素が，本質において変わることのない原理として存在する。

7　ソクラテスは，無実の罪で自分を死に追いやろうとするポリスの現状を恥ずかしく思い，抗議のために毒杯を仰いだ。

8　プラトンは，知恵を愛する者が，勇気を身につけた防衛者階級と節制を身につけた生産者階級を統治するとき，正義が実現すると考えた。

9　アリストテレスは，正義・節制・友愛などの倫理的徳は，人間に生まれつき備わっていると考えた。

10　ゼノンのストア派は，欲望を抑えていかなる感情にも心を動揺させることのないアパテイア〔不動心〕をめざして暮らすことを生活信条とした。

11　モーセは王の宮殿で育てられたが，荒野で啓示を受け，奴隷となっていた同胞を約束の地カナーンへと向かわせ，神から授けられた律法〔トーラー〕を示した。

12　イエスはユダヤ教内で人格的応答の視点が後退し，いわゆる福音主義が台頭したとき，これを徹底的に批判した。

13　キリスト教では，イエスが自らの言行を編集した『新約聖書』に新たな文章を加えることが禁じられ，聖典を正しく保持すべきとされた。

14　４～５世紀に活躍したマルクス=アウレリウスは，青年期は欲望のままに生きていたが，神への信仰に目覚め，悪に苦悩しながら，自らを見つめ直していった。彼は，その遍歴を，著作『告白』に記した。

15　トマス=アクィナスは，当時ギリシャ語やアラビア語から翻訳されたアリストテレスの哲学に大きな影響を受け，その配分的正義の考えを踏まえ，私有財産制度を認めつつ，同時に，貧者への施しなどを通して社会における富の偏在を是正する必要性を説いた。

16　健康な成人男女は，イスラーム暦９月のラマダーン月の日中，一切の飲食を断たなくてはならない。

17　イスラームでは，アッラーへの信仰を異教徒から守るためにジハードを行うことが義務であり，11世紀末からの十字軍への対応も，その一例と考えられている。

18　ウパニシャッド哲学では，アートマン〔我〕と宇宙原理が同一であることを直感し，それによって永遠性を獲得することが輪廻を脱した境地として追及された。

19　正しい言葉を語ることは，いわゆる「八正道」の中の一つとして，正しい実践の重要な要素と考えられている。また，嘘をつかないことは，殺生をしないことなどとともに，いわゆる「五戒」の中にあげられている。

20　『法句経』は世親〔ヴァスバンドゥ〕の代表的な著作である。一切は心の表象にほかならないとする唯識派の教理を説いている。

21　孔子の考えた「よい生き方」とは，上下の序列にもとづいた秩序を尊重するとともに，己の欲望を制限し身を修めようとする生き方である。

22　孟子は，人間の本質は善であるので，王は徳によって民衆を平等に愛するべきだとする兼愛思想を説いた。

23　老荘思想における「道」は万物の根源であり，天地に先立って生じ，感覚では捉えられず，言葉では表現できないものである。

24　朱子学では，万物は気の運動によって生成し存在することを説く。

25　和辻哲郎によると，砂漠型の風土においては，人々は戦闘と恬淡の態度をもち，モンスーン型の風土においては，人々は対抗と決断の態度をもつ。

26　『古事記』によると，世界は唯一絶対の神を根拠とするのではなく，おのずからなった世界であり，そこに多数の神々が存在している。

27　神仏習合とは，神道と仏教とが重なり合うことを意味し，神道または仏教いずれかが支配的に理解されることもある。

28　末法思想を否定した道元は，ひたすら坐禅に打ち込むという修行こそがそのまま悟りであるとする修証一等を唱えた。

29　山崎闇斎は，心をつつしむ修養の厳格な実践を説き，のちに儒教と日本の神話とを結合させた垂加神道と呼ばれる独自の神道説を唱えた。

30　山鹿素行はその著書で，武士道というものは死ぬことである，と説いた。

31　伊藤仁斎は，『論語』『孟子』の原典に立ちかえることを訴え，真実無偽の心として誠の重要性を主張した。

32　荻生徂徠は，聖人の言葉に直接触れるために古代中国の言語を研究する必要を訴え，のちの国学の方法論にも影響を与えた。

33　本居宣長は，『古事記』を読解し，そこに描かれている神々の事跡から，人間の普遍的な生き方としての道を見いだした。それは惟神の道と呼ばれ，儒教・仏教と同じく，神々に従って素直に生きる身の処し方であった。

34　石田梅岩は，正当な仕方で利益を増やすことが商人にとっての正直であり，商人には，競争相手との駆け引きに勝って，自分の商売が繁盛するように考える競い合いの心が大切であると説いた。

35　安藤昌益は，すべての人々が田畑を耕して衣食住を自給する平等社会を，理想的な「自然世」と呼んだ。そして，自ら耕さず農民に寄生している武士などが存在する当時の差別社会を「法世」と呼び，「自然世」への復帰を説いた。

36　福沢諭吉は，文明の根本にある自立の精神を内に保ち，自らの判断力を養い実理を窮めて文明社会を実現する近代的人間を構想し，育てようとした。

37　中江兆民は，為政者が人民に恵み与えた権利であっても，人民はそれを育てていき，その権利を実質的なものに変えていかなくてはならない，と主張した。

38　夏目漱石は講演『現代日本の開化』の中で，日本の近代化が胚胎した社会的・思想的な諸矛盾を「外発的開化」の語を用いて指摘した。

39　内村鑑三は，キリスト教の信仰にもとづき，日露戦争に際しては，絶対平和主義を主張して，徹底した非戦論を唱えた。

40　西田幾多郎のいう「純粋経験」の例として，「将棋好きのＡさんは，公開対局でプロ棋士の一心不乱に考える姿を見て，会場まで駆けつけた甲斐があったと喜んだ」は，正しい。

41　折口信夫は，古代日本人の心性に奥深く分け入る方法によって「まれびと」としての神と人々との交流を理論化した。

42　吉野作造は，明治憲法の範囲内で民本主義を貫徹させるには，国民の意思がより反映する普通選挙の実施と政党内閣制の実現が望ましいと主張した。

第４講　解答

1	○	2	×	3	×	4	○	5	○	6	○	7	×	8	○
9	×	10	○	11	○	12	×	13	×	14	×	15	○	16	○
17	○	18	○	19	○	20	×	21	○	22	×	23	○	24	○
25	×	26	○	27	×	28	○	29	○	30	×	31	○	32	○
33	×	34	×	35	○	36	○	37	○	38	○	39	○	40	×
41	○	42	○												

〈***Note***〉